

記録としての証言から文学へ

—チェルノブイリと福島，2つの原発事故をめぐる言説—

安元隆子

Takako YASUMOTO. From testimony as record to literature — Chernobyl and Fukushima, discourses over two nuclear accidents —. *Studies in International Relations* Vol.37, No.2. February 2017. pp.43-52.

There is a nuclear accident common to Japan and Russia. From these incidents, I compare works compiled from tweets and testimonies, as well as my own studies. After March 11th 2011, Wago Ryoichi expressed various feelings on twitter about the nuclear accident. After that, he also listened to stories of the people in the disaster area, and he wrote poems from what he heard. At “Big Palette Fukushima”, an evacuation center, people took part in a “footbath”. Fukushima disaster victims’ tweets were gathered and published in a book “I’m now living and will continue to live in Big Palette Fukushima”. These tweets are very brief and simple and perhaps many people would not consider them as literature. Svetlana Alekshievitch’s “The Prayer of Chernobyl” is a collection of testimonies from victims of the Chernobyl nuclear accident. It does not contain comments from interviewers and authors, it only features testimonies of the victims. The author arranged the testimonies in order. We can understand her message from the way she presented the testimonies. It’s more than just a collection of testimonies, it is literature. It is of great interest the kind of literature that will appear from the Russo-Japanese citizens who experienced the same nuclear accident.

【はじめに】

2つの原発事故—チェルノブイリと福島—

旧ソ連と日本の共通体験の一つに原子力発電所の事故がある。チェルノブイリと福島である。核の平和利用を信じた人類を襲った2つの大惨事を、日本と旧ソ連圏の人々はそれぞれどのように受け止め、表現し、歴史に残そうとしてきたのだろうか。そこに共通点はあるのだろうか—。本論では、チェルノブイリと福島，この2つの原発事故をめぐる言説について検討していく。

まず，2つの原発事故について振り返っておく。

1986年4月26日，チェルノブイリ原子力発電所第4発電ブロックで非常用の電源テスト中に爆発火災事故が起きた。原因は，出力調整電源テスト従事者の規則違反や，制御棒設計の欠陥などが挙げられる。事故によって環境中に放出された放射性物質は推定10 t前後，広島型原爆の約400倍ともいわれ，ヨーロッパ諸国，北半球の大部分の地域に及んだ。事故直後に急性放射線障害で亡くなっ

た原発職員，消防士のほか，上空から炉を密閉するための作業や原子炉を覆う「石棺」の建設，除染作業など，事故処理のために約80万人の兵士や労働者が動員され，彼らは「リクビダートル」¹と呼ばれた。この処理作業や周辺住民は，被曝によって白血病，甲状腺がんなどを発症し，これまでに多数が亡くなっている²。原発から半径30 km周辺は放射能汚染危険区域として住民約135,000人が避難し，現在も居住が禁止され，500を超える村が廃村になっている。しかし，避難先の生活になじめず，また，望郷の念や経済的な理由から村に戻る「サマシヨール」³と呼ばれる存在もある。そして，北東350 km以内に約100か所点在している「ホット・ゾーン」と呼ばれる局所的高濃度汚染地域では事故から30年経った現在も農業や畜産業は禁止されている。「チェルノブイリ」は原発史上最悪の事故と呼ばれる。

一方，東京電力福島第一原子力発電所の事故は2011年3月11日の東日本大震災による「想定外」の大津波が原因で電源が喪失し，翌3月12日，炉

心溶融、炉心貫通によって1, 3, 4号機の水素爆発が起きた。大気、土壌、海洋、地下水などへ大量の放射性物質が放出され⁴、10万人以上が避難した⁵。事故から5年が経った現在、福島県内の市町村をはじめ放射能汚染地域では除染が進み、避難指示も徐々に解除されてはいるが、原発周辺の帰還困難地域は住民の帰還の目途が全く立っていない。国際原子力事象評価はチェルノブイリ原発事故と同じレベル7の深刻な事故と認定している。チェルノブイリの事故があったにもかかわらず、再び起きた福島での深刻な原発事故である。原発のエネルギーメカニズムは原子爆弾と同じであることは周知の事実であり、ひとたび事故が起きれば大変な事態を引き起こすことはわかっている。とすれば、「想定外」はありえないはずであり、チェルノブイリを教訓に福島原発はもっと盤石な対策を取っておくべきだったと悔やまれる。しかし、もう遅い。眼に見えず、匂いもしない放射能に襲われた人々の想いはどのようなものだったのか。遺伝子を傷つけられ、これから後、いつ発病し死に至るかわからないという恐怖と共に生きていかねばならない被曝者たちの想いは想像するに余りある。

本論は、このように起きてしまった旧ソ連と日本の2つの原発事故について、小説や詩ではなく、人々の「声」つまり、「つぶやき」や人々へのインタビューから得られた「証言」を元にまとめた著作を中心に比較し、記録としての証言と文学について考察する。

【I】「つぶやき」から「対話」、そして、「詩」へ

2011年3月11日に東日本を襲った大地震の後の強い余震と福島原発の爆発に遭遇した福島県、特に浜通りと呼ばれる太平洋側の地域に住む人々は、より内陸側の中通りと呼ばれる地域や会津地方、そして、県外に避難した。しかし、さまざまな事情でその地に留まらなければならない人々もいた。家族と離れ、絶え間なく続く余震と眼に見えない放射能への恐怖の中にその身を置く時、人は「死」の不安に一人で耐えることは難しくなる。この状

況を、この想いを理解してほしい、共有したいと考えた時、人は言葉を発する。そして、心の中の思いを吐露する。現代では、「ツイッター」という装置がその想いを拡散する。遠く離れた不特定多数の人々のところへも、瞬時に言葉を運んでくれるのである。福島の極限の状況下で、このツイッターを用いて発信したのは福島の詩人・和合亮一である⁶。

『詩の礫』は⁷、福島在住の詩人・和合亮一が被災6日目から「ツイッター」で発した言葉をまとめたものである。先の見えない極限状況の中で、震災と放射能汚染への恐怖と怒り、故郷・福島の地と人々への絶望といとしさを140字という制限の中で、湧き起こる感情のまま、礫のように発したこれらの言葉は迫真性と臨場感にあふれている。発せられるのとほぼ同時に拡散したこれらの言葉は、1万人を超える読者を得た。あの時の和合亮一の「ツイッター」を再現してみる。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:23:57
震災に遭いました。避難所に居ましたが、落ち着いたので、仕事をするために戻りました。みなさんにいろいろとご心配をおかけいたしました。励ましをありがとうございました。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:29:23
本日で被災六日目になります。物の見方や考え方が変わりました。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:30:21
行き着くところは涙しかありません。私は作品を修羅のように書きたいと思います。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:30:46
放射能が降っています。静かな夜です。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:31:22
ここまで私たちを痛めつける意味はあるのでしょうか。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:33:03
ものみな全ての事象における意味などは、それらの事後に生ずるものなのでしょう。ならば「事後」そのものの意味とは、何か。そこに意味はあるのか。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:34:35
この震災は何を私たちに教えたのか。教えたものなぞ無いのなら、なおさら何を信じ

れば良いのか。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:35:37

放射能が降っています。静かな静かな夜です。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:44:49

あなたにとって故郷とは、どのようなものですか。私は故郷を捨てません。故郷は私の全てです。

和合亮一 @wago2828 2011-03-16 21:53:56

放射線はただちに健康に異常が出る量では無いそうです。「ただちに」を裏返せば「やがては」になるのでしょうか。家族の健康が心配です。

このように発せられた言葉は詩のかけら、と呼ぶべきものであり、何の錬磨もされていない心の叫びのようなものである⁸。これらをまとめた『詩の礫』の最後は「明けない夜はない」という言葉であった。常に新しい言語表現を目指してきた現代詩人たちから観れば、この「明けない夜はない」に代表されるようなこの時の和合の言葉は、安易に使い古された言葉の羅列であり、激情に流され発せられていて到底「詩」と呼べるものではない、という批判も多く出された⁹。しかし、家族と離れ、放射能が降る中で、余震におびえながら心に去来することばをそのまま綴って発信しているだけに強く胸に迫るものがあることは確かだ。このつぶやきに接した人々は励ましや共感の想いをツイッターで和合に返した。和合亮一は更に次のように言っている。

これらに触れているうちに自分の閉ざされた内側の何かに息吹を感じたのだった。このことは今もなお続いている。やがて私は被害のはなはだしい相馬の浜辺へと行き、その様子を写真に撮影したり、詩に書き継いでいったりするようになった。／そして時を同じくして被災地の人々の話に耳を傾けるようになった。この震災をどのように受け止めたのか、どんな傷を受けたか、どんなふうにして気力を取り戻したのか。耳を傾けていると、何度か互いに涙が溢れてくるのが分かった。時にはそれをぬぐいながら、語り合った。振り返ってみれば、数多くの言葉はもちろんだが、時々黙り、涙し、さらにしゃべり始める間こそ

が、私たち福島人の真実であったのかもしれない。／私は我が家に戻り、その「沈黙」へと向けて、言葉を書き連ねた。被災した現実を知る方々の声に耳を傾け、押し黙り、詩を書く……。震災の傷を互いに分かち合い、何かを手渡しあうために必要な、私たちの再生の儀式の始まりであった。

言葉によって、同じ境遇に置かれた人々を確かめ、理解しようとし、その際に生まれた沈黙を言葉によって表現しようとする。そして、その行為自体が再生の儀式であった、ということだ。これは和合亮一だけではなく、福島の人々に共通したものであっただろうことが、和合亮一自身がインタビューした人々との会話の中から知ることができる。例えば、和合亮一と67歳の遠藤千代子さんとの対話の中には次のようにある。

避難所に来てしばらくは、落ち込んでいたんですけど、その女性スペースでおしゃべりするようになって、人と話すようになって、人と話すことができる快感があるんだなと思いましたね。人間って言葉とか出会いとか大事なんだなって。言霊っていうか。言の橋っていうか、良い言葉をどんどんかければ、良い橋がつながる気がします。言葉が足りないと、相手の気持ちもわからない。言葉が足りなければ、家族もそうでしょう。悲しいときに、悲しいよねって言うてくれれば、その悲しみは半分になる。嬉しいことは何倍にもなる。ただ話をするだけで救われるし、何にもなくなるまで、空っぽになるまで全部を話すとか気づくことがあるのね。自分で答えが出るっていうかね。

ここには言葉が人々をつなぐ経験が如実に語られている。そして、語ることで見えなかった指針を発見することができるようになるのだ。この遠藤千代子さんとの対話を元に和合亮一が書いたのが、次の詩である。

一つの言葉でけんかして／一つの言葉で泣き笑い…／避難してここまで頑張ってきているんだから／何度でも／立ち上がろう／言葉には魂がある／言葉には橋がある／良い橋を作れば／また良い「言の橋」が出来

る／／富岡町に帰りたい／／それが叶うなら
／／町の人々に／うんと やさしくしたい

和合亮一は、対話を自らの中に取り込み、それを再構築して詩の言葉としている。これらをまとめた『詩の邂逅』¹⁰という詩集では、和合亮一の書いた数篇の詩のあとに、和合亮一が行った福島の人々へのインタビューを「対話」として付している。いわば原風景とそこから紡ぎ出された詩の組み合わせ、ということになる。そして、その過程は先にも書いたように震災によって傷ついた人々の「再生への儀式」そのものだったのである。ただ、「対話」は人々にとって再生へのステップではあったものの、詩の素材の位置に留め置かれていたのではない。この「対話」の中の言葉、つまり、市井の人々が語る素朴な言葉自体を文学とすることはできないのだろうか。

次に、同じように福島県の避難を体験した人々の言葉を綴った著作を検討したい。

【Ⅱ】被災者たちの「つぶやき」

東京電力福島第一原子力発電所の事故の際、郡山市にあった、「ビッグパレットふくしま避難所」には最大2,500名が避難していた。地震発生から1か月後に県庁避難所運営支援チームの常勤職員が配置され、その一員である天野和彦氏は、赴任した際、避難所にいる人々の故郷を喪失したやるせなさそこから来る無気力な状態に接し考えさせられたという。しかし、入所者名簿やフロアマップの作製、避難経路の作成、感染症の処置や対策などを行っていくうちに、徐々に避難所の人々の中に交流の場ができ、自治活動が行われるようになったことを報告している¹¹。そうしたビッグパレットふくしま避難所の活動の一つに「足湯」がある。

「足湯」とは、1997年、阪神淡路大震災が起こった時、鍼灸師のインターンが避難所の人々にホッとしてもらえる時間を提供したいと、各避難所をめぐったのが始まりだという。その後、2004年の新潟中越地震、2007年の能登半島地震、同年の新潟県中越沖地震、2009年岩手・宮城内陸地震で被災地域の地元大学生により広まり、被災地間で受

け継がれている。「足湯」を通して被災者の声をじっくりと聴き、心に安らぎをもたらすと同時に、不安や心に抱えていることを話してもらい、次の支援を考えるために用いられてきた。足をお湯に浸し、からだを温め、手をマッサージすることで気持ちもほぐれ、自分の言葉で想いを語り、それを聞いてくれる人がいることで更に気持ちが軽くなるのだ。足湯ボランティアが心を傾けて話を聞くことで、被災者は一人ではない、そばに寄り添ってくれる人がいるのだ、ということを感じるのにちがいない。足湯で自然と語られた言葉は「つぶやき」として書き留められ、支援へとつなげていくという¹²。その「つぶやき」をまとめ、刊行されたのが『生きている 生きてゆく ビッグパレットふくしま避難所記』¹³なのである。収録されたつぶやきの中には、たとえば、

戦争よりも放射能の方がひどい。／全てを失った。菜っ葉も椎茸もダメになった。犬を自宅に置いてきたんだ。／よく分かっている犬で、車の音で家族を見分け、角でちゃんと待っているんだ。帰るときも角で見送ってくれる。右膝が痛いんだけど、その右膝を舐めてくれるんだよね。(70代・女)

というように、原発事故の放射能被害を受けた不条理を強く表明しているものがある。当然、それは東京電力や日本の原発行政そのものに怒りの矛先が向く。

・東京の人は、福島の人に感謝しなければ駄目だ！福島の方は馬鹿だげんども、東京の人はピカピカいい思っていて、電気使ってるんだから。(後略)(70代・男)

・東京電力福島第一原発っていっても、東京電力の部分はいわれなくて福島第一ばかりいわれっからよ。(50代・男)

このように、東京の人々のための電気を作っているのが福島原発であり、福島の人々は東北電力の電気を使っているにもかかわらず、事故が起きればその責めを一身に負うことになる。原発は人口過密な東京には置かれないのだ。人口密度が低く、過疎化の傾向があるから地域振興のために原発を誘致する。そうした地方団体には交付金が出されて、さまざまな箱モノが建てられる。しかし、

原発があるところに住民は集まらず、箱モノの維持のためにまた原発を誘致する負の循環構造ができあがってしまう。実はこうした負の構造については、福島の人々、若松丈太郎が今回の大震災が起る20年ほど前に「東京から300キロ地点」で指摘していることなのだが¹⁴、福島の人々も今回の原発事故を受けてこうした構造の持つ不条理に新たに気づかされたのに違いない。それは必然的に未来を担う若者への提言に結びついていく。

これからの若い人は原発に反対せにゃいかん。
／外国のように、若い人がデモとかで動かなきゃあかん。(60代・男)

しかし、全体的に足湯の際のつぶやきは、不自由な避難所での生活にもかかわらず、不平不満や快適な生活を取り戻すための主張というよりも、今、こうして存在していただけることへの感謝の念を抱いているものが多い、という特徴がある。

・ここでじぶんのできることを探して楽しくやってるのよ。／本当に周りの人たちのおかげだわ。／感謝が大事ね。／(中略)／毎晩手を合わせて反省して、感謝してるわ。(60代・女)

・わがまま、ぜいたくを言っではいけない。／ありがたいよ。／まだ一時帰宅していないから、Tシャツも全部もらってた。(50代・女)

このように、周囲の人々への「感謝」の念を全面に表しているのは日本人に特有な現象なのではないだろうか。不便な生活を強いられながらもその状況に感謝の念を表す心性は、存在自体を運命にゆだねる心性に結びついている。

人生は運命だね。人生は7割が運命で、3割が努力だよ。／よい運命に出会えるといいね。／よい人生送りたいね。(70代・男)

こうした心の内は、話を聞いてくれる人がいることによって、引き出されて行く。被災者たちはそれをつぶやくことで心が軽くなる。そのことは被災者たちも実感していると思われる。

笑うっていうのはいいことだ。／この足湯って、話すことが大事なんだな。／こうやって話して笑うことで心がすーつと軽くなるよ。(50代・男)

これらのつぶやきは被災者によるものであり、また、本来は被災者のために還元するものであることは先に述べた通りである。しかし、同時にこれを読んだ人々の心も揺さぶる。次は俵万智の『生きている 生きてゆく ビッグパレットふくしま避難所記』の「帯」の言葉である。

ここにあるのは、非日常を日常として生きなくてはならなかった人たちの、つぶやきです。
／等身大の言葉が、まっすぐ心に飛び込んできます。

この言葉の通り、名もなき市井の人々の言葉は、レトリックで飾られることなく、確かにストレートに読者の胸に迫ってくる。原発政策について、事故を起こした東京電力について、避難所の人間関係、避難所のごはんやおかずについて、家族のこと、これまでのこと、これからのこと… 言葉の断片ではあるが、素直なその言葉は、すべてが読者の心に迫るであろう。だが、〈被災地から発信する「ビッグパレットふくしま避難所」の記録〉と銘打たれて刊行されたこの本は、文字通り「記録」であって、その世界はまだ「文学」ではない。

【Ⅲ】 多声による歴史を叙述した文学へ

和合亮一のような、対話から詩を生み出した方向性とは別に、『生きている 生きてゆく ビッグパレットふくしま避難所記』のように、証言者から言葉を引き出す役目を果たすインタビュアーを消し去り、証言のみを組み合わせ一つの著作とする方向性がある。しかし、それはともすれば「記録」に留まりがちである。それを「文学」の次元にまで高めるにはどうしたらよいのだろうか。

チェルノブイリ原発事故を様々なデータに基づき再現した著作は多い。フィクションであれ、ノンフィクションであれ、ドキュメンタリータッチで原発内の人びとの動きや心情を追いつつ事故を再現したものや¹⁵、さまざまな放射線の数値や罹患者のデータを用いて事故の深刻さを裏付ける試みもある¹⁶。そうした著作の中で注目に値するのは、スベトラーナ・アレクシエービッチのチェルノブイリ原発事故の被災者たちの証言を集めた『チェルノブイリの祈り』¹⁷である。彼女は、2015

年、ノーベル文学賞を受賞した。「私たちの時代における苦難と勇気の記念碑といえる、多様な声からなる彼女の作品に対して」の授与であり、この「多声的な叙述」はスベトラーナ文学の大きな特色である。

・普段なら目に付かない証言者たち、当事者たちが語ることを通じて歴史を知る。そう、わたしが関心を寄せているのはそれだ。それを文学にしたい。(中略) まだぬくもりの冷めぬ人間の声に、過去の生々しい再現にこそ、原初の悦びが隠されており、人間の生の癒しがたい悲劇性もむきだしになる。その混沌や情熱が、唯一無二で、理解しきれないものが、ここではまだなんの加工もされておらず、オリジナルのままある¹⁸。

・一人の人間によって語られるできごとはその人の運命ですが、大勢の人によって語られることはすでに歴史です¹⁹。

と語り、人々の生の声を集め、一つの作品にすることを明らかにしている。こうした意識の下にまとめられたのが『チェルノブイリの祈り』である。この方法は、アレーシ・アダモービッチ²⁰の著作から示唆を受けたものだと言及自身書いている²¹。アダモービッチを師として、スベトラーナは幾重にも重なる声を私たちに提示しているのである。

こうした証言としての「声」を集める時、インタビュアーの「声」が聞こえる時とそうでない時がある。スベトラーナの著作でも、『チェルノブイリの祈り』では、インタビュアー、またはインタビューをまとめる著者としての彼女の存在は他の証言者とほぼ同等に置かれ、自分自身へのインタビューが試みられ、その結果、筆者の序文は「見落とされた歴史について—自分自身へのインタビュー—」と題して本文初めから2番目に置かれ、通常の「序」や「前書き」といった作者の巻頭言を著書の冒頭に置く形ではなく、他の証言と同じレベルに置く形となっているのである。

しかし、スベトラーナがいつもこのような形で著作をまとめていたかということ、そうではない。彼女の第一著作である『戦争は女の顔をしていない』は、独り戦に加わった女性兵士たちの証言を

集めたものであるが、冒頭に「人間は戦争よりずっと大きい」と題した執筆日誌が掲載されている。そして、元女性兵士たちの証言のところどころにインタビュアーとしての作者が顔を出し、読者を牽引していく。たとえば、証言の部分の冒頭は次のようにして始まる。

ミンスク市の町はずれ。古い三階建ての建物が戦後すぐに間に合わせに建てられたまま、今は生い茂るジャスミンのなかに心地よさそうに埋もれている。私の探索はこの家から始まり、それは七年間続くことになるのだが、驚きと苦悩に満ちた七年間だった。私はあらためて戦争というものを知り、それは私たちが知らなかったことばかりだった。

これは長い旅路となる……何十回となく国中を歩き回る。数百本のテープ、数千メートル分の録音、五百人を超える人々への取材、いやその数を超えてからはもう数えなくなった。声だけが私の頭の中で響いている。頭の中で合唱している。巨大な合唱、そこでは時として言葉が聞き取れず、嗚咽しかない。嘘は言うまい。この道を進んでいけるという自信はなかった。しまいまで行くことができるのか。やめてしまいたい。脇道にはずれてしまいたい、というような迷いや不安の時があったが、もうやめられなかった²²。

このように証言を集める取材の方法が語られている。そして、「—数日後マリヤ・イワーノヴナが電話をしてきて戦友のクラウヅチヤ・グリゴエヴナ・クローヒナを紹介してくれた²³。」というように、証言が集まっていく過程も明らかにしている。それだけではない。

一九四一年の乙女たち……まず、訊いてみたいのは、ああいう娘たちはどこから現れたのかということ。ああいう行動をした乙女たちがなぜあんなにたくさんいたのか？ どうして男たちとともに銃をとろうという決断をしたのか？ 銃を撃ち、地雷をしかけ、爆破し、爆撃する……つまり殺すという決断を……²⁴

というように、スベトラーナの想いも「声」となっており、「証言」の「声」と共に「物語」を形成してい

くのである。まるで多数の「声」を先導していくかのように。しかし、こうした方法は徐々に影を潜め、『チェルノブイリの祈り』では先ほども書いたようにスベトラーナは時代を構成する一証言者の一人と見なされる。「著者」をも消し去り、重層的な人々の声で歴史を再現しようとしているのである。

ただ、人々の声を証言として集める方法自体はもっと以前からあったに違いない。が、単に証言を並べただけではそれは「文学」とはなり得ないだろう。「証言」を「文学」に変えるものとは何なのだろうか。この『チェルノブイリの祈り』は、証言の構成がかなり綿密な計画の下に成されていることに気づく。全体を俯瞰すれば、冒頭と末尾に同じタイトルを付けた証言「孤独な人間の声」を置き、先に述べたように筆者の序文は「見落とされた歴史について—自分自身へのインタビュー—」と題して本文の初めから2番目に置かれ、他の証言とほぼ同等に扱われている。また、それに続けて「死者たちの大地」「万物の霊長」「悲しみをのりこえて」と3つの章立てがあり、各章の終わりにはそれぞれ「兵士たちの合唱」「人々の合唱」「子どもたちの合唱」というように、証言者別に小さな証言を集めてまとめている。つまり、私たちがどのような世界をその重層的な声の中から感受するのかが私たちに任されているのだが、証言をただ証言としてだけ羅列するのではなく、そこには構成意識が明らかに働いているのである。

同時に、事故の再現ではなく、人々がチェルノブイリ原発事故から何を学び、どのように変化したのか、ということを作作者・スベトラーナが追究しているからに他ならないだろう。スベトラーナ自身、次のように書いている。

人は、あそこで自分自身の内になにを知り、なにを見抜き、何を発見したのでしょうか？ 自らの世界観に？ この本は人々の気持ちを再現したものです、事故の再現ではありません²⁵。

では、具体的にこのチェルノブイリ原発事故から人々は何を得、どのように変わった、とスベトラーナは考えたのか。それは、人々が社会主義時代の集団的発想やソ連的ヒロイズムを脱し、「個

を発見し「私」が発想の基盤となる世界へ足を踏み入れた、ということであろう。しかし、これだけではない。チェルノブイリ原発事故により放出された「放射能」という眼に見えず匂いもしない、しかし、人々の生命を脅かし死を喚起するものに対する恐怖。つまり、戦争で戦った者は戦場から帰還すればこれから生きていくことが可能だったが、チェルノブイリでは、リクビダートルは帰還後、いつ死や病に遭遇するのかわからないという恐怖と常に向き合っていかなければならなかった。これは過去の独ソ戦やアフガニスタン戦争では味わったことのない、初めての体験であった。もちろん、こうした人類にとっても未体験の境地にさまよい出た人々の不安、戸惑いだけではなく、スベトラーナはそれらに打ち勝とうとする愛の力、命の意味など、決して数値や図式に還元できない、人々の「チェルノブイリ」の哲学をも著しているのである。そして、それは最初と最後に同じ「孤独な人間の声」という章を置いたことにも象徴的に表れている。ここには異なる被曝者の語りが続けられているが、共通しているのは「愛」と「生命」の持つ力が示唆されていることである。こうした「哲学」が内在していること、ここにこそ「記録」に留まる「証言」ではなく、「文学」としての「証言」集が成立するのである。

【終わりに】

著者の存在を表面上は消去し、国が作る大文字の歴史ではなく、それが取りこぼしてしまう民衆の心の歴史を、人々の声を重ねることで描いたのがスベトラーナ・アレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』である。同じく原発事故を体験した日本でも、『生きている 生きてゆく ビックパレットふくしま避難所記』のように、人々の声を記録として書き残そうとする試みはあった。また、和合亮一が試みたように、人々の声を元に自らの言葉で文学とする試みもなされてきた。しかし、スベトラーナ・アレクシエービッチのように、人々の「声」そのものを「文学」に昇華する試みはまだ成されていない。彼女は、人々の「声」を集めたが、それによって事故を再現するのではな

く、人々の心の動き、つまり社会主義時代の集団的発想やソ連的ヒロイズムを脱し、「個」を発見し「私」が発想の基盤となる世界へ歩みだす人々の「チェルノブイリの哲学」を、明確な構成意識によって著すことに成功したのである。チェルノブイリと福島という、レベル7の原発史上最悪の事故を共に体験した旧ソ連圏と日本の人々が、これらの事故を記録としての「証言」から「文学」として今後どのように表現していくのか、注視していきたいと思う。

【謝辞】

本論は、科学研究費補助金、基盤研究(C)、JSPS 科研費JP25370416、「スベトラーナ・アレクシエーヴィッチの文学の研究—証言が文学が変わる時—」(研究期間2016年4月～2019年3月)の成果の一部である。

【註】

- 1 ロシア語ではЛИКВИДАТОР。チェルノブイリ原発事故の処理作業員のこと。ЛИКВИДАЦИЯ(清算, 解消, 整理などの意味)の語から派生。
- 2 『調査報告 チェルノブイリ被害の全貌』アレクセイ・V・ヤプロフ他,(岩波書店, 2013年4月), p.23によれば, 90年頃よりチェルノブイリ原発事故が原因とみられる子どもの甲状腺がんの急増が報告されている。ベラルーシでは, 次のような報告がある。「成人の甲状腺がん罹患率は, 6倍以上増加している。子ども(1986年当時0-14歳)の発祥のピークは1995-1996年で, 1986年と比較して39倍にも増している。」(『チェルノブイリ原発事故ベラルーシ政府報告書 最新版』ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害者対策局編, 産学社, 2013年, p.51の「甲状腺の被曝線量」の項)。
- 3 ロシア語ではСАМОСЪЛ。チェルノブイリ原発事故に伴う立ち入り禁止区域への自主帰還者のこと。1987年では約1,200人を数えたが, 2013年の段階では190人程度といわれる。高齢者がほとんどで自然な人口減少が起こっている。
- 4 諸説あるが, 東京電力はチェルノブイリ原発事故の約6分の1としている。
- 5 環境庁の平成25年度版「環境・循環型社会・生物多様性白書」によれば, 平成25年3月時点での福島原発事故による福島県全体の避難者数は15.4万人に上ったが, 平成28年7月現在の福島県「福島復興ステーション」によれば, 地震・津波, 原発事故併せての福島県の避難者数は8.9万人余りとなっている。
- 6 1986年生まれ。福島県福島市出身。福島県の高校教師として勤務しながら詩作を続ける。第一詩集『AFTER』(思潮社, 1998年)で第4回中原中也賞受賞。他に『詩の黙礼』(新潮社, 2011年), 『詩の邂逅』(朝日新聞社出版, 2011年), 『廃炉詩編』(思潮社, 2013年)など。「歷程」同人。「六本木詩人会」主催。ラジオパーソナリティも務める。
- 7 『詩の磔』, 和合亮一, 2011年6月, 徳間書店
- 8 和合自身は「THE FUTURE TIMES」2014.6「受容と未来—震災のわからなさ・意味性をどう閉じ込めていくか」の中で, 「震災直後, 余震と放射能にさいなまれているなか, 誰の言葉が正しいのかわからないなかで, こういう極限状態に置かれてなお, そのことを, ありのまま, そのままに書こうと思っていた自分がいた訳です。福島で起きている真実を書きたい。それで, 毎日毎日, これは福島の空気の記録だと思って, シュルレアリスムの世界を描いていたけど, 原発が爆発した時点で, 現実がシュルレアリスムになってしまって, それを語る方法を, 僕自身, 持ち得なかった。そんなとき, 自分の傷をそのまま伝えるのが, 一番の方法だと思ったんですね。それは3ヶ月続いて, 毎晩毎晩, 詩を書き続けていたわけです。」と語っている。
- 9 荒川洋治は『昭和の読書』(幻戯書房, 2011年)の中で,

震災後に書かれた詩について、〈大量の、しまりのない、たれながしの、ただ饒舌としか思えない詩が書かれ、文学『特需』ともいう事態を引きおこした。詩の被災だ。〉と批判している。また、絳秀実「和合に象徴される「詩壇」の劣化は、1989年の湾岸戦争時における詩人たちの、これまた愚劣だった対応より、はるかに後退」(『反原発の思想史』筑摩選書、2012年)したと批判した。高橋源一郎は、『詩の黙礼』の完成度に物足りなさを感じていると言い、「書かれざる悲しみに欠ける」と指摘した(「2011年の詩」、『新潮』2011年11月)。また、小関和弘は「あなた、大切なあなた」、「あなたは今、何をしていますか」、「僕はあなたです。あなたは僕です」といった表現に鼻白む、といい、〈人間全体を指すかのような「私たち」を濫用してしまう事実〉に、〈現代人の〈共同〉性への強い希求を持つ危うさ〉を見ている。(「言葉と共同性—震災後の詩を手がかりに」、『評論』187号、日本経済評論社、2012年)。

- 10 『詩の邂逅』, 和合亮一, (2011年, 朝日新聞社出版)
- 11 『生きている 生きてゆく ビックパレットふくしま避難所記』, 「ビックパレットふくしま避難所記」刊行委員会, 2011年9月, pp.216-221
- 12 註11所収, 「『足湯』について」, pp.227-229
- 13 註11参照。
- 14 『詩と思想』1991年6月, 後に『福島原発難民』(コールサック社, 2011年) 所収, pp.24-27。
- 15 フレデリック・ポールの『チェルノブイリ』, (講談社文庫, 1987年) や, アラ・ヤロシンスカヤの『チェルノブイリ 極秘』(平凡社, 1994年), 『チェルノブイリの嘘』, (緑風出版, 2016年) などがある。
- 16 『調査報告 チェルノブイリ被害の全貌』, アレクセイ・V・ヤプロフ他, (岩波書店, 2013年4月), 『チェルノブイリ原発事故ベラルーシ政府報告書 最新版』, ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害者対策局編, (産学社, 2013年), など。
- 17 “ЧЕРНОВЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА. ХРОНИКА БУДУЩЕГО” (1997) — 日本語訳『チェルノブイリの祈り』(松本妙子訳, 岩波書店, 1998年)。2011年, 岩波現代文庫に収録。
- 18 “У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО” (1984) “СВЕТЛАНА АЛЕКСИЕВИЧ СОБРАНИЕ ПРОИЗВЕДЕНИЙ, У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО” p.16 ВРЕМЯ, МОСКВА, 2013, — 日本語訳『戦争は女の顔をしていない』(三浦みどり訳, 群像社, 2008年) p.13。
- 19 “ЧЕРНОВЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА. ХРОНИКА БУДУЩЕГО” (1997) “СВЕТЛАНА АЛЕКСИЕВИЧ СОБРАНИЕ ПРОИЗВЕДЕНИЙ, ЧЕРНОВЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА” pp.33-34 ВРЕМЯ, МОСКВА, 2013, — 日本語訳『チェルノブイリの祈り』(松本妙子訳, 2011年, 岩波現代文庫, p.32。)
- 20 1927-1994。ベラルーシの作家。戦時中はパルチザン部隊にいた。ダニール・グラニンと共に行ったレニング

ラード包囲体験者への膨大なインタビューと日記や手記から成り立つ“БЛОКОДНАЯ КНИГА”(モスクワ, 1982), 日本語訳『ドキュメント 封鎖・飢餓・人間』上・下(宮下トモ子他訳, 新時代社, 1986年)のほか, “Иди и смотри”を映画化した映画『炎628』などがある。

- 21 註18の2013年ロシア語選集版p.9, 日本語訳版p.13にはA.アダモービッチの著作を読み, 「これまでにない形があった。人間が生きている現実そのものの声が集まって作品になっている。(中略) わたしが探していたものを見つけた。そういう予感があった。アレーシ・アダモーヴィチはわたしの師となった……」とある。
- 22 註18の2013年ロシア語選集版p.37, 日本語訳版p.43
- 23 註18の2013年ロシア語選集版p.44, 日本語訳版p.50
- 24 註18の2013年ロシア語選集版p.53, 日本語訳版p.58
- 25 註19の2013年ロシア語選集版p.30, 岩波現代文庫・日本語訳版p.32

【主要参考文献】

- ・『調査報告 チェルノブイリ被害の全貌』アレクセイ・V・ヤプロフ他, (岩波書店, 2013年)
- ・『チェルノブイリ原発事故ベラルーシ政府報告書 最新版』, ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害者対策局編, (産学社, 2013年)
- ・和合亮一『詩の磔』(徳間書店, 2011年)
- ・和合亮一『詩の黙礼』和合亮一(新潮社, 2011年)
- ・和合亮一『詩の邂逅』和合亮一(朝日新聞社出版, 2011年)
- ・『廃炉詩編』和合亮一(思潮社, 2013年)
- ・若松英輔・和合亮一『悲しみが言葉をつむぐとき』(岩波書店, 2015年)
- ・神戸女学院大学文学部総合文化学科『東日本大震災と私たち』(冬弓舎, 2014年)
- ・佐野眞一・和合亮一『言葉に何ができるのか 3.11を越えて—』(徳間書店, 2012年)
- ・荒川洋治『昭和の読書』(幻戯書房, 2011年)
- ・絳秀実『反原発の思想史』(筑摩選書, 2012年)
- ・高橋源一郎「2011年の詩」(『新潮』2011年11月)
- ・小関和弘「言葉と共同性—震災後の詩を手がかりに」(『評論』187号, 日本経済評論社, 2012年)
- ・『生きている 生きてゆく ビックパレットふくしま避難所記』(「ビックパレットふくしま避難所記」刊行委員会, 2011年9月)
- ・野家啓一『物語の哲学』(岩波書店, 2005年)
- ・坂部恵『かたり—物語の文法』(筑摩書房, 2008年)
- ・若松丈太郎『福島原発難民』(コールサック社, 2011年)
- ・『チェルノブイリ』, フレデリック・ポール, (講談社文庫, 1987年)
- ・『チェルノブイリ 極秘』, アラ・ヤロシンスカヤ, (平凡社, 1994年)
- ・『チェルノブイリの嘘』, アラ・ヤロシンスカヤ, (緑風出版, 2016年)

-
- スペトラーナ・アレクシエービッチ『戦争は女の顔をしていない』(群像社, 2008年)
 - スペトラーナ・アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』(岩波書店, 1998年)
 - “СВЕТЛАНА АЛЕКСИЕВИЧ СОБРАНИЕ ПРОИЗВЕДЕНИЙ, У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО” ВРЕМЯ, МОСКВА, 2013.
 - “СВЕТЛАНА АЛЕКСИЕВИЧ СОБРАНИЕ ПРОИЗВЕДЕНИЙ, ЧЕРНОБЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА” ВРЕМЯ, МОСКВА, 2013.
 - アレーシ・アダモービッチ『ドキュメント 封鎖・飢餓・人間』上・下(新時代社, 1986年)